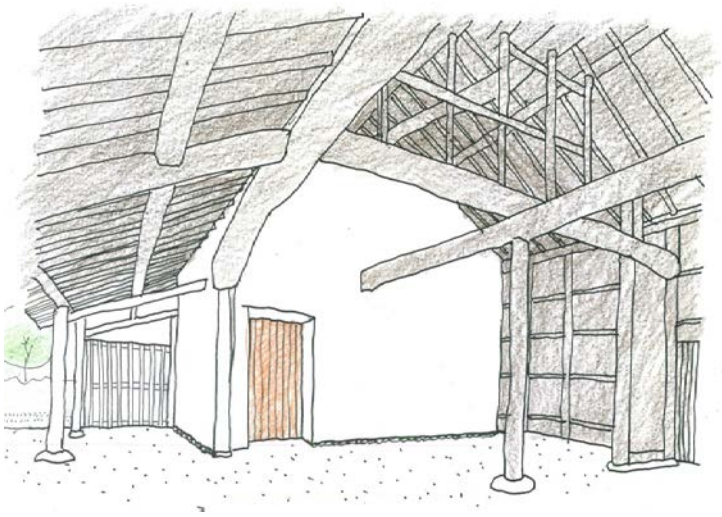
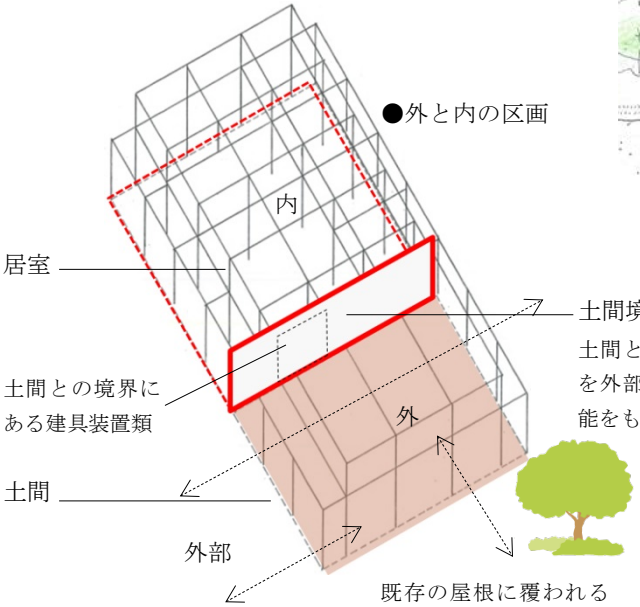
森村家住宅の内と外の区画方法



森村家の塗籠による居室確保の手法例



模式説明図

土蔵両引きの土戸部分、内側は片引きの板戸となる。民家の土間境など季節単位で開閉をおこなう場合など類似の性能を確保したい。

▲真壁町の土蔵の改修例

●規模の評価

前年度の報告書において千葉県北西部の柏市・白井町・松戸市の民家調査による間取りの事例や今回の千葉ニュータウンの戸建住宅の規模とも比較し、伝統民家は規模がそれらに対してかなり余裕がある床面積であることも確認できた。また、土間の有用性と日常生活や生産活動との均衡が崩れ、土間の空洞化ともいえる現象が進み、改造等が進展したと考えられる。

所有者にとっての適正規模は、用途・家族構成・趣味嗜好等により評価は異なるが、住まいの大きさは住み手が求める基本的条件である。住宅ストックの健全な活用も、この条件に対する技術的な対応が必要である。

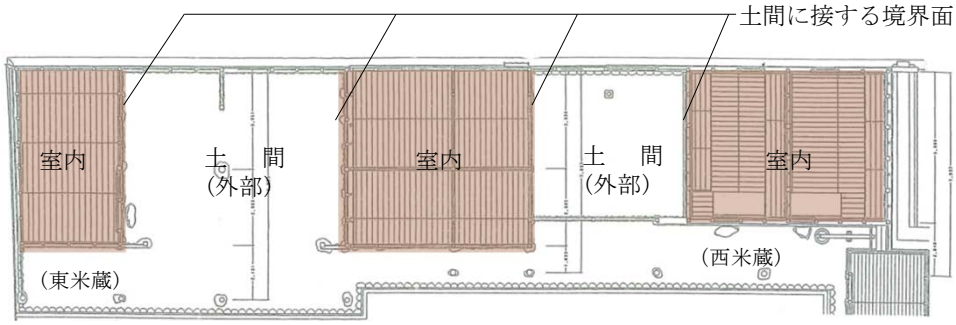
●屋根の下の「家」

房総地方に限らず既存の伝統民家は茅葺屋根の平屋建てが多く、立地環境や気象条件も市街地とは異なる。厳しい自然地形や気象条件を抱える場所を除けば、一般的に都市部に比較して農山村の環境は清澄で穏やかである。

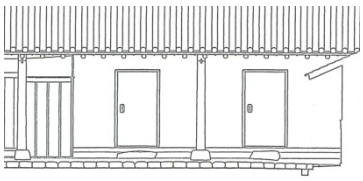
屋根の下の「家」とは、そのような立地環境を生かし屋根の下を吹放しの外部空間とし、そこに熱的環境制御が可能な性能をもつ「家」を意味する。床面積を減じる方法でもある。このような建物の使い方は改修に限らず、農村部には規模は小さいが、蔵とマテヤ(作業場)が一体化されている形式に見ることができる。また森村家住宅(奈良県)では米蔵や納屋が吹放し屋根の下に配されている。

●土間境の仕様

「減」の手法を求められた場合、土間に接する壁面や開口は外壁とみなし同程度の性能をもつことを基本としたい。また伝統民家の足元まわりには「根がらみ貫」が通る場合や土台が敷かれている場合、さらに柱間に貫があること等の条件が想定され、かなり抑制されるが、対処法が全くないとも断定できないと考えたい。「増」か「減」または「現況」通りかは住み手の選択による。



森村家住宅の東米蔵・西米蔵、納屋部分平面図および東米蔵立面図（部分）



西米蔵

図：奈良県教育委員会「森村家住宅保存修理工事報告書」(2006)を基に作成

当出版物(PDFなどの電気的・磁気的ファイルを含む)は著作権を有しております。一部あるいは全てにおいて、改変、複製、転写等、著作権法により禁じられております。商業目的であるか否かを問わず、無断で再配布(直リンクを含む)することを禁止いたします。